

小説

はやし  
ふみこ  
林  
芙美子

下関市  
(1903～1951)



提供・新宿歴史博物館

【著作】

『放浪記』（昭和5・改造社）  
『晩菊』（昭和26・河出書房）  
『林芙美子全集』全16巻（昭和52・文泉堂出版）ほか

作家林芙美子（本名フミコ）は、明治三十六年（一九〇三）

鹿児島出身林キクの子どもとして下関市田中町（北九州市門司区説もある）に生まれた。父は愛媛出身の行商人で宮田麻太郎といい、質物の店を下関に開いて成功するが、やがて母キクが番頭沢井喜三郎と共に芙美子を連れて家を出たことから、各地を流れ歩く不幸な少女時代を送ることになる。その間、明治四十四年（一九一一）十月まで下関市名池尋常小学校に学ぶ。のち尾道市に移り、この地で師に恵まれて文学の道に目覚め、尾道高女卒業後上京。女中、売り子、女給など、様々な職業を経験。その中から体得した強い生活力と庶民性によって明るさと詩情をたたえた文学世界を創出。昭和三年（一九二八）発表の『放浪記』で一躍流行作家となる。

戦時下は軍や報道関係に動員されて中国大陸・南方へと赴き、意欲的に執筆。戦後、ジャーナリズムの復活とともに戦前にも勝る旺盛な創作活動を開始。昭和二十三・二十四年（一九四八・一九四九）に至ってその文学的生涯の頂点ともいえるべきときを迎え、「晩菊」「浮雲」などの秀作を発表。

しかし、過度の執筆から体調を崩し、朝日新聞に「めし」を連載中の昭和二十六年（一九五一）六月二十八日未明、心臓麻痺のため急逝。ひたむきに生きた四十七年の生涯であった。

（文・清永唯夫）



下関市立名池小学校前  
文学碑



実父 宮田麻太郎と芙美子



林芙美子学籍簿

林 芙美子 年譜

（提供・清水唯夫）

明治36（一九〇三）年

下関市田中町に生まれる。（北九州市門司区説もある）本名はフミコ。父は愛媛県出身の行商人宮田麻太郎、母は鹿児島県出身の林キク。戸籍上では12月31日の出生となっているが実際は5月か6月の出生と伝えられている。父麻太郎が下関市豊前田町に「軍人屋」という店を出す。

明治37（一九〇四）年

「軍人屋」が繁盛し、本店を石炭景気の若松に移す。母キクが番頭沢井喜三郎とフミコを連れて家を出、長崎、佐世保と転住。

明治40（一九〇七）年

1月10日、下関市名池尋常小学校へ転入。義父喜三郎が田中町で古着屋を開業。

明治43（一九一〇）年

古着屋倒産。10月6日、無届転住のため名池尋常小学校を退学。（4学年2学期）。

明治44（一九一〇）年

九州各地を転々としたのち両親と共に尾道に移住し、尾道市立第二尋常小学校五学年に編入学。小林政雄訓導に目をかけられて文学的に開眼。

大正7（一九一八）年

尾道市立高等女学校に入学。森要人・今井篤三郎両教諭に影響を受け、文学書に熱中。

大正10（一九二一）年

秋沼陽子の筆名で地元新聞等に詩や短歌を投稿。女学校卒業後、因島出身の恋人岡野軍一（明治大学生）を頼って上京。

大正11（一九二二）年

岡野との間が破局。関東大震災で尾道に帰る。筆名を「芙美子」とし、この頃から出世作「放浪記」の原型となる日記を書き始める。

大正12（一九二三）年

再び上京。近松秋江家の女中を初めに、女工、売り子、事務員、女給などの職を転々。7月、友谷静栄と同人詩誌『二人』を刊行。平林たい子らを知り『文芸戦線』等に詩を発表。

大正13（一九二四）年

平林のもとに同居。12月、長野県出身の画学生手塚緑敏と結婚（内縁関係）。

昭和3（一九二八）年

10月より『女人芸術』に「放浪記」の副題で「秋が来たんだ」を連載（5年10月まで）。

昭和4（一九二九）年

6月、詩集『蒼馬を見たり』を処女出版。

昭和5（一九三〇）年

1月、台湾総督府の招待で台湾を講演旅行。7月、『放浪記』をへ新鋭文学叢書（改造社）の一冊として刊行。ベストセラーとなる。8月から9月にかけて中国大陸を旅行。

昭和6（一九三一）年

二八歳

昭和7（一九三二）年

二九歳

昭和8（一九三三）年

三〇歳

昭和9（一九三四）年

三一歳

昭和10（一九三五）年

三二歳

昭和12（一九三七年）年

三四歳

昭和13（一九三八）年

三五歳

昭和14（一九三九年）年

三六歳

昭和15（一九四〇）年

三七歳

昭和16（一九四一年）年

三八歳

昭和17（一九四二年）年

三九歳

昭和18（一九四三年）年

四〇歳

昭和19（一九四四年）年

四一歳

昭和20（一九四五年）年

四二歳

昭和22（一九四七年）年

四四歳

昭和23（一九四八年）年

四五歳

昭和24（一九四九年）年

四六歳

昭和25（一九五〇）年

四七歳

昭和26（一九五一年）年

四七歳

「風琴と魚の町」「清貧の書」等を発表。11月、シベリア経由で欧州旅行に出発。

欧州滞在中（主にパリ滞在）に紀行文・随筆を数多く発表。6月に帰国。

義父喜三郎が死去し、母を自宅に引き取る。この頃から旅行が多く、絵を描くことにも興味を持ち始める。

5月、「放浪記」映画化される。

『林芙美子選集』全7巻（改造社）刊行。12月、毎日新聞特派員として南京攻略戦に従軍。

『林芙美子長篇小説全集』全8巻（中央公論社）刊行開始。ペン部隊の一人として漢口攻略戦に従軍。

自伝的作品「一人の生涯」を「婦人之友」に連載。11月、小林秀雄らと朝鮮へ講演旅行。

8月、淀橋区下落合に新居を建て移住。9月、朝日新聞の委嘱で満州国境各地を慰問旅行。

10月、報道班員として南方に派遣される。

5月、南方より帰国。12月、生後間もない男児をもらい受け、泰（たい）と名付ける。

3月、夫緑敏と泰を林家に入籍。長野県に疎開。童話を書いて子供達に読み聞かせる。

終戦後、疎開先から下落合の自宅に帰る。10月5日、実父麻太郎が下関で死去。

8月より「うず潮」を『毎日新聞』朝刊に連載（11月まで）。

11月、「晩菊」を『別冊文芸春秋』に発表。『林芙美子文庫』全十巻（新潮社）刊行開始。

11月より「浮雲」を『風雪』に連載（のち『文学界』に引き継いで26年4月まで）、「晩菊」とともに林文学の頂点を示す作品となった。この年、「晩菊」により第3回女流文学者賞を受賞。

この冬、過労のため持病の心臓弁膜症悪化。4月より「めし」を『朝日新聞』朝刊に連載。6月28日未明、心臓麻痺のため逝去。7月1日、自宅で告別式。中野区高田万昌院功運寺に納骨。戒名は純徳院芙蓉清美大姉。「めし」は未完に終わる。

林芙美子